

虎にまつわる物語

―日中両国の文献からの

アプローチ―

欒 殿武

本日は寒い中、足元の悪い中お越しいただきましてありがとうございます。お手元に資料は四枚あると思います。先ほど岡田先生が御紹介された時に今年から趣向を変えて「干支を語る」というところなのですけれども、何故今日トラのお話をするかといいますと、実は数年前に南方熊楠の『十二支考』という本を読んで、その内容があまりにも博識といえますか、知識の広さに感動しまして、それで苦勞して翻訳して、北京の中華書局で出版されました。中国の読者にもぜひ南方先生の本を読んでもいただきたいということ。『十二支考』の最初は「寅」の歴史、伝説と民族という部分で、その時に調べたものとか、あるいは興味を持った分野の話を、今日は研究という視点じゃなくて、物語の面白いところをご紹介させていただくという意味でお話をいたします。たまたまですが、日本はお正月が終わりまして寅年に入り、一ヶ月経ったのですが、中国では今日は旧暦のお正月の大晦日、明日から旧正月の元日ということでもまだホットな話題なのです。それで、この「寅」と「虎」というふたつの字は、基本的に日本ではみんな「とら」と呼ばれていますけれども、左の方の字は正確には「イン」と読んで、動物の虎と本来全く

関係のない文字なのです。中国でもこれが確かに干支で「とら」という認識をしていますけれども、やはり「虎」と区別して使っていたわけで、もともとは時間と方位を表す字なのです。どこにありますかと、ちよどこに書いてあるように「七つの時」という、午前の四時を表します。午前四時の前後一時間、昔は二十四時間じゃなくて、十二時間と計算して、現在の二時間がひとつの単位として計算された訳なのです。それが午前の四時は寅刻と、そういうふうにいわれております。もうひとつは方位を表す、右の絵を見ていただきたいんですけども、北東北の方向を指している。これが「イン」という文字なのですが、もともと虎と全く関係ないのです。これは要するに「十干十二支」の中のひとつ、方向を表すものだった訳です。では、いったいいつ方向を表すもの、あるいは時を刻むものが、動物の虎と一緒になったのかという疑問が出てくる訳ですが、どうもこれははっきりしていないようです。文献には残っていないので、確実なことがわかりません。実は漢民族の漢人たちはですね、最初は天候、あるいは気象に敏感でそういった方位に関しては、割と早い時期にこういった細かい分類ができたんですけども、年を数える干支として使うという習慣がなかったのです。で、動物を人間の年とか、あるいは年として数えるというのが、北方の騎馬民族の習慣、具体的に言いますと、モンゴル人の習慣だったらしいですね。それで子、丑、寅と、北方民族の年を数える動物と、漢民族の方位を表す文字と合体して、こういうふうになったといわれています。では、いつ合体したかといえますと、南方熊楠の論によりますと、どうも漢の時代ではないかと言われています。ただ根拠があんまりないです。実は中国でも「とら」を方向として使っていたんです。皆さんがご存知ですが、

白虎は西の方向を指しているわけですね。

だから、「とら」がもともと方向を表すときは西を表していた訳ですね。これは漢民族の人たちが考えたものなのです。だから現在の干支というものが、要するにあくまでも少数民族といいますが、北方民族の文化だと考えていただきたいと思うんです。「十干十二支」に関しては若い人が傍聴していますので、ちょっと簡単に説明させていただきますと、十干は甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸の十種類、十二支は子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十二種類です。この十干と十二支を組み合わせて暦日を数えますが、ちょうど組み合わせは六十まで数えるわけです。だから六十は還暦というふうにいわれています。六十一からまた最初から数えるというふうには。だから甲子、甲と子をあわせて最初年を数える時のものです。「十干十二支」は日本では現在、滅多に使わないんですが、暦の中には載っています。日本に比べて、中国ではまだまだかなり使われています。

それでは、さっそく虎にまつわる物語に入りますが、ご存知のように虎が生息している地域はアジアだけなのです。北はシベリアからです。南は東南アジアまでです。インドが特に多いといわれていますし、また朝鮮半島にかつてたくさん生息しているといわれています。ホットな話題としては、二〇〇七年十月三日に中国で野生の華南虎を撮影したという人物が現れて、その写真をネットで公開したら大騒ぎになりました。華南トラは動物園以外の自然界から姿が消してもう数十年経っているとされていますから、今、野生の華南トラがまだ自然界に生息しているのと、一般の人が信じ込んでしまったのですが、どうも偽造の写真らしいのですね。結局その人が詐欺の疑いで裁判にかけられたという、ちょっと

としたトラ関連のエピソードがあるんです。実は中国では東北地方でまだ野生の虎が若干いるようですが、大きな野生保護地域で、人工で飼育して今一千年まで増やしたというニュースは、先日聞いたことがあります。このように、現在虎が非常に珍しい動物になっていますが、昔は虎がたくさん広い中国で生息していました。北の方ではシベリアの虎が、南の方では華南の虎が生息していたという記録があります。華南の虎が別名「中国虎」と呼ばれ、ちょっと小型ですが、細い模様で、中国中部の広大な地域に生息しています。それで中国の文献の中に、もしくは小説の中にたくさん虎にまつわる物語が残っているわけです。ちなみに日本には虎がいないのです。日本の文献の中には若干虎に関する記録もありますので、今日とりあげてみたいと思います。

まずは虎による被害についてちょっとお話をします。中国の筆記小説、小説類あたりを読むと、虎の出没や被害の多発する話はいろいろなところに載っています。例えば最初の「白虎」(『華陽国志』)の中に載っているものですが、春秋戦国の時代なんですが、秦昭襄王の時に白虎が害となるといいます。このときは白虎が暴れて、二〇〇人ぐらいの人に被害を与えたというような話があるのです。これはあくまでも小説の中の話で、信憑性のある数字であるかどうか、定かではないと思います。

次は『独異志』の「種僮」に「種僮為讎令、常有虎害人。」(「種僮、讎令と為り、常に虎ありて、人に害を与える。») というような記録もあります。

三番目を見ますと、『法苑珠林』の「嚴猛」に「晋時、会稽嚴猛婦出采薪、為虎所害。」(「晋の時、会稽の嚴猛の妻が薪を採り、虎

に殺されてしまった。」という話があります。

さらに『五行記』の「蕭泰」に「時虎甚暴、村門設欄。」（時に虎、甚だ暴れ、村門に欄を設ける）と書いてあります。要するに虎が人里に降りてきて悪さをしているから、村の門に欄をつくって、虎の侵入をふせいだと言います。

中華文明というのは早熟の文明ですので、わりあい早い時期に農耕民族として成功して、次々と農地を開拓して、結局山にどんどん接近して虎の生息地に近づいてしまったので、これは決して虎が悪いのではなく、人間が虎の生息地に侵入してしまったというふうに考えていいと思います。ただ、古代ではそういう認識がなくて、虎が現れて暴れてしまったというふうに考えていました。

次に『朝野僉載』『酉耳獸』に「唐天后中、涪州武龍界多虎暴。」（唐の天后時代に、涪州武龍の界、多くの虎が暴れた。）とあります。天后というのが唐の時代のひとつの年号です。これは、「酉耳獸」という小説なのですが、実は虎が非常に獷猛な動物で、百獸の王といわれているんですが、酉耳獸という獸は虎よりもっと強いという物語です。物語の中で、ある人の前に、一匹の猛獸が走ってきたので、慌てて木の上のぼつたら、あまり大きくない獸がさあつと走っていきました。後で、前の方へ行ってみたら、虎の骨が残っているとあります。要するにこの獸が虎を食べてしまったというような話です。当時はいろんな伝説が流布しているのですから、いわゆる麒麟のような伝説の獸かもしれないです。

さらに、『解頤録』の「峡口道士」という小説なのですが、開元中、峡口多虎、往来舟船皆被傷害。」（開元の中、峡口に虎が多く、

往来の舟船は皆、みんな被害を受ける。）とあります。『広異記』の「費忠」に「境多虎暴、俗皆棲居以避之。」（境に多くの虎が暴れ、民間人が皆、棲に居し以て之を避けた。）と書いてあります。つまり、虎が多く現れて被害が多く、人々に危害を与えるから、人々がみな二階建ての建物を作って二階の上に寝泊りをして、虎から避難したという話です。『広異記』という小説は、中国のいわゆる民間の伝説、あるいは民間に流布している物語を集めたもので、その中に虎がたくさん現れたという記録です。

虎の被害を受けた理由というのは、実はいろいろあります。先ほど出てきたのが薪を採りに行って、虎に食べられてしまったと、これは一番単純な理由です。要するに虎の生息地と人間の生活地域が重なってしまったため、狭いところで出会ってしまつて、虎が人間を食べてしまうという話です。また、虎の被害が多く出てくるにつれて、人間が作り話を考えるようになるわけです。つまり宿命として決まっているから、虎に食べられるのだというようなことをいつているわけです。これも『広異記』『稽胡』と『続玄怪録』『廬造』に出ています。例えば虎を追っていくと、道観に消えてしまいました。どうも、虎がもともと道教の導師が化けてなったようです。道観の部屋に机があつて、その上に一冊の帳簿が置いてある。その帳簿にいろんな人の名前が書いてあつて、名前に線を引かれたり、墨を塗られたりして、その人は虎に食べられたという話なのです。もちろん近代に入ると、これは迷信で片付けられちゃうんですけれども、実は虎に食べられてしまった人間は、「俛鬼」という特別なことばで呼ばれていました。それが虎に食べられた鬼の名前なのです。これはもともと供養されていない鬼のことです。日本では祭りを

やっていると、赤鬼と青鬼が出てきますが、いい鬼と悪い鬼の区別がありません。しかし、中国では鬼というのはいいも悪いもないのです。皆悪いもので、幽霊なのです。

幽霊というのが祖先の霊と区別されて、祖先の霊はちゃんと供養されているもの、お盆の時、または清明節の時に、仏教の儀式に基づいてちゃんと供養されて、つまり、お墓で先祖にちゃんとお供え物をして、供養します。いま、日本ではふだん仏壇に供えるという習慣があります。中国の家庭では日常生活でそういう習慣がなく、年に何回かお墓参りするときには、供養するわけです。要するに、あの世にいる先祖にひもじい思いをさせたり、お金に困らせたりしてはいけません。つまり、先祖の霊はお金がないと、悪さをするので、お金を送らないといけないのです。そうすると、いま印刷のお金のような紙を焼いて、あの世の先祖の霊に送るといふ習慣があります。子孫に供養されない霊というのが、浮遊霊になり、鬼になるわけです。この霊が悪さをするわけです。例えば虎に食べられてしまったこういう浮遊霊は、次に虎を連れてきて悪さをします。虎の案内人として出てくるのです。それで民俗学からの観点からいいますと、結局虎に食べられてしまった、被害にあった人とその家族が可哀想ですけれども、虎の案内人になるということで隣人から嫌われるのです。そのような人は普通の墓地に埋葬されることも許されない時期があったらしいのです。

四頁にひとつ変わった物語があります。これは悲しいストーリーの物語ではなくて、面白い物語です。挙げてみました。これは『広異記』の「宣州兎」です。あらずしを言いますと、宣州というところに小さな子供がいて、その住まいは山に近く、毎晩よく一人の鬼が虎を案内して

やってくるのが見えるわけです。そうすると、数十回見えてきたので、この子供が次のように親に告白したわけです。「鬼が虎を連れてくるわけですから、私は必ず殺され、死んでしまうわけです。世間の言われているように虎に食べられてしまうものが、佞鬼になりますので、これは仕方のないことです。もし虎が私を案内人として使う場合は、私は必ずこの村にやってきます。そのときに夢に現れてくるから、そのお告げを聞いたなら、その虎を捕らえてくれ」と言ったわけです。要するに自分が虎に食べられてしまうが、それでも村人のために役に立つように働くというわけです。そうすると、村中に落とし穴を設けて、重要な道路のところみんな待っていて、虎を捕えることができるようになります。数日後、案の定、この子供が虎に食べられてしまって、それで話の通り、村人がめでたく虎を捕えたという話です。大体、虎に食べられてしまうというのは悲しい物語ですが、これは変わったストーリーの物語です。

それでは、虎の被害に対する防御の方法は何だろうか。ひとつは逃げるのです。筆記小説の中に虎と出会ったときに、とにかくみんな木の上のぼってしまおうという話がよくできます。次には退治する方法ですが、これは後に譲ります。三番目は虎とコミュニケーションをするという方法です。伝奇小説、または怪異小説ですので、物語に出てきた虎がしゃべるのです。要するに、昔、道教の導師が虎に化けると、虎の皮を被ると虎になるんです。自分の道観に戻ると、それを脱いでどこかにしまおうのですが、それを隠すと、もう虎に戻ることができないということになります。そうすると、自分は虎になる運命だから、返してくれないと、別の悪い虎になるから、返してくれと懇願するわけです。そうすると、今後、村人に危害を与えない方法を聞きますと、翌日に猪、また

は自分の血を塗った豚を一匹草むらにおいて、虎がそれを餌にして食べてしまいます。そうすると、その帳面に載っている村人の名前を墨で塗らないで帳消しするという話です。つまり、猪などの餌を献上し、無罪放免になる話です。これは小説の中によく出てくる話です。虎が中国の広い地域に生息していましたので、昔の文献の中によくいろいろな伝説が載っています。

例えば、『戦国策』の物語、『戦国策』は皆さんご存知のように先秦文学で、戦国時代に活躍した遊説家たちの言論活動や知略について述べた歴史書です。秦・斉・楚・韓・魏・趙・燕・東周・西周・宋・衛・中山の十二か国ごとに構成しており、非常に面白い読み物です。ここに虎の話が出てきます。まず『戦国策』の「楚策」に「虎の威を借る狐」という有名な話があります。

「虎求百獸而食之。得狐。狐曰、子無敢食我也。天帝使我長百獸。今子食我、是逆天帝命也。子以我為不信、吾為子先行。子隨我後、觀百獸之見我而敢不走乎。虎以為然、故遂与之行。獸見之皆走。虎不知獸畏己而走也。以為畏狐也。」

「虎、百獸を求めて之を食らう。狐を得たり。狐曰く、子あえて我を食らうこと無かれ。天帝我をして百獸に長たらしむ。今子我を食らわば、是れ天帝の命に逆らうなり。」

子、我を以て信ならずと為さば、吾、子が為に先行せん。子我が後に随いて、百獸の我を見てあえて走らざるかを觀よ、と。虎以て然りとなし、故に遂に之と与に行く。獸之を見て皆走る。虎獸の己を畏れて走るを知らざるなり。以為らく狐を畏るるなり」。

もう一つは『戦国策・秦第二』に載っている話です。

「今両虎争人而斗、小者必死、大者必傷。」（今双方が、人間を奪い合う二匹の虎のように争えば、弱者は敗北し、強者もまた痛手を被るであろう）。

二頭の虎が一人の人間を捕らえて餌として争っているときに、ちょうど有名な強い武士が、虎と戦おうとしたら止められたのです。まず虎同士に戦わせて、そうすると二頭の虎がいるから必ず一頭が傷つき、一頭が死んでしまうと、そうすると残った一頭を刺せば、二頭の虎を退治した名誉をもらえるという話です。

次は『禮記』「檀弓篇」によく出てくる言葉で、「苛政猛于虎」「苛政は虎よりも猛し」と言います。これは昔の苛酷の政治の害を虎に譬えて言う言葉です。孔子が各国をまわって遊説するのですが、そのときに泰山の近くで一人の女性を見かけました。その女性がお墓の前で泣いていたので、孔子がなぜ泣くのかと聞いたら、実は私の舅が虎に殺されてしまったので、私の夫も子供も虎に殺されてしまった。それで埋葬して泣いたと。そうすると孔子は何故この土地を出て行かないのかと聞いたら、ここは苛政（厳しいまつきごと）がないと、孔子が納得して「苛政は虎よりも猛し」を言ったのです。

筆記小説にも、政治を虎に譬える話があります。「封邵」（『述異記』）という短い物語があります。漢の宣城郡に封邵という知事がいて、お城を治めています。しかし、この人は、無為無策で百姓のためにもいいことやったことがない。ある日、この人が突然虎に化けてしまった地元の人に危害を加えてしまった。そうすると、庶民はその虎を「封使君」と名付けました。それで、庶民は、封邵という知事をからかって、生き

ているときには民を治めず、死んだあとは民を食べてしまうと、風刺しました。

次に「亭長」（『搜神記』）も官僚を風刺する物語で、湖南省の長沙近くの百姓がかつて檻を作つて虎を捕らえるという話です。虎を捕らえたら、その檻の中を見ると、実は、帽子を被つて赤い官服を着た亭長という地元の有力者だったわけです。その訳を聞いてみると、亭長が昨日、県の知事に召されていくときに、誤つてこの中に入ってしまったと言つて怒りました。そうするとその人を放したら、その亭長が虎になつて逃げました。つまり、このふたつの話はともに政治家が悪い政治をやつていふから、虎に変身したと譬えられてしまうのです。この話のモチーフはほとんど『禮記』の「苛政は虎よりも猛し」に基づいていると思えます。

虎がたくさん生息しているところで、虎を退治するというエピソードが現れ、虎退治の英雄の話が生まれます。中国で一番有名な物語は『水滸伝』ですが、この小説は、日本でもかつて江戸後期、明治初期あたりにも広く読まれていました。『水滸伝』には武松が素手で虎を退治するという話が出てきます。この話は、みなさんよくご存知ですので、あまり詳しくは説明しませんが、武松の虎退治については、歌川国芳と葛飾北斎の迫力満点の浮世絵がありますが、『水滸伝』の中にもうひとり李逵という武将がいて、二本の斧を使う人物ですが、彼は梁山泊に登つて反乱を起こして、頭領の一人になりましたので、実家に誰も面倒をみてくれない母親を連れてこようとしたのです。母親を背負つて梁山泊に行く途中に、母親が喉が渴いたので、李逵が水を採りにいく間に母親が虎に殺されてしまったのです。そうすると李逵が怒つて虎を殺しに行つたん

です。それで、李逵は虎の巣を見つけ、四頭殺しました。

このように、虎が生息しているところ、必ず虎退治の人がヒーローとして迎えられるわけです。武松が虎を退治した後、地元の狩人、武松と虎の死体を担いで県知事のところへ届けに行きました。賞金がでるからです。筆記小説の中にもこのような物語がでてきます。一方、日本では『南総里見八犬伝』に大江親兵衛が掛軸から抜け出た霊虎を退治したという話があります。『南総里見八犬伝』の舞台は関東地方ですが、ご存じのように日本には虎がいなかったので、結局馬琴も虎退治のモチーフを取り上げるとき、なかなか書けなくて、掛軸から抜け出た霊虎が降りてきて暴れたという話に仕上げたわけですね。管領細川政元のもとに瞳無し（無しの）虎の掛け軸が持ち込まれるので、政元はこの掛け軸の話に疑念をもつて絵師を呼んできて瞳のない虎の絵に瞳を描かせたところ、虎が飛び出して瞳を入れた絵師をかみ殺して山へ逃げました。細川政元に絵から抜け出た霊虎退治を依頼され、名馬をもらった大江親兵衛は供も連れずに一人で白川山の山中に入りましたが、突然虎に襲われて、名馬走帆の健闘もあつて、二矢で虎の両目を射抜きました。親兵衛はぐったりした虎に馬から下りて近付くや、右の拳で虎の眉間を連打し、骨が陥没して遂に虎は倒されました。大江親兵衛が退治したという話です。

『水滸伝』のはじめに『南総里見八犬伝』の元と思われる部分があります。北宋の第四代皇帝仁宗の時代、疫病が蔓延し、打てる手を尽くした朝廷は最後の手段として、竜虎山に住む張天師に祈禱を依頼するため、太尉の洪信を使者として派遣します。竜虎山に着いた洪信は様々な霊威に遭つて、試練を受けました。その中で道観内を見学する洪信は「伏魔殿」と額のかかった、嚴重に封印された扉を目にします。聞けば、

唐の時代に、天界を追放された百八の魔星を代々封印している場所で、絶対に開けてはならないと言われています。しかし、これに興味を持った洪信は道士たちの制止も聞かず、権力を振りかざして無理矢理扉を開けさせました。このように、封印と絵の虎の瞳を入れないことと同じ効果です。

次にかの有名な加藤清正の虎退治の話です。『常山紀談』に「清正虎を狩れし事」という話が載っています。

加藤清正の陣に虎が現れ、馬を殺したばかりでなく、小姓の上月左膳をもかみ殺しました。清正は、夜明けとともに虎がひそむ山を取り巻かせました。その時、一頭の虎が生い茂る萱をかきわけ、清正めがけて走って来ました。大岩の陰にいた清正は鉄砲の狙いを定めました。虎との間はおよそ三十三間。虎はそこで立ち止まり、清正をにらみつけました。家来たちは一斉に鉄砲を撃とうとしましたが、清正ははやる家来を押しとどめました。清正との間をじりじりと詰めた虎は、カッと大きく口を開き、猛然と清正にとびかかりました。その瞬間、轟音一発、清正の鉄砲が火を吹きました。弾は喉に打ち込まれ、虎は倒れた。一度は立ちあがろうとしたものかなわず、痛手を受けたため、さすがの虎もそのまま絶命しました。

これは朝鮮征伐のときに朝鮮半島で清正が虎を退治したという記録です。このときに銃を使って虎を撃ち殺してしまつたのです。

中国の筆記小説に戻りますが、「白虎」（『華陽国志』）という話があります。いまの陝西省あたりで白虎が現れて、皆被害を受けました。そうすると、国王が賞金をかけて虎を殺せる者に、土地、金、絹を与えると言つたら、異人、つまり少数民族の勇者が出てきました。その人が竹で

できた弓で高い櫓の上から虎を殺したわけです。頭に三本の矢を射抜いて虎を殺したのです。国王がこの虎がいろいろところで悪さをして二〇〇人に被害を与えたので、これで被害を取り除いてくれたと喜んでいました。そうすると、本来最初の約束通り、土地と金と絹を与えるべきですが、ただ、この人は少数民族ですから、昔の漢人の中華思想の考え方に基づきますと、少数民族の人たちが夷狄、つまり野蛮人だというような位置づけだったので、こんな人に賞金を与えていいのかというところで、約束を反故にしようということで、違う形で約束をしました。そうすると、石に同盟関係を刻みつけ、今後漢人とこの少数民族が仲良くして戦わないと、少数民族の人たちが小さな田んぼをもし借りて耕す場合は、賃料を払わなくていい、また漢民族の人にもし怪我をさせたら、罪を問わない、人を殺しても死罪にはならないと、もし秦の国が少数民族の人に危害を与えた場合、黄金一両を与える。もし逆の場合はお酒一本をもらおうという話があつたわけです。

筆記小説の物語によりますと、虎を退治した者がみんな褒められて何かの賞金をもらえるそうです。虎退治の方法はどんなものがあるかというところ、捕獲檻が一番多いのです。虎が非常に力強いものですから、人間が武松のように棒やこぶしで戦うことがまずありえないわけなんです。そうすると捕獲檻を設置して、熊を獲ると同じような方法です。次に落とし穴が多いのです。三番目に出でくると、勇者が刀、弓矢、棒、斧など武器を使って格闘するわけですね。勤自励という人は棒を使ったという話ですし、武松も最初棒を使って、最後に素手で格闘していたという話があるわけで、フィクションです。

人間と虎の関係の最高の形は、虎を退治するのではなく、虎を自分の

子分として、あるいは馬のように使うんですね。道教の中の仙人のひとり、鄭思遠という人が虎の穴を探して、中に入ってみると、三匹のまだ目が開いていない赤ちゃん虎がいたので、殺すのにしのびないというところで、三匹の赤ちゃん虎を連れて自分の住まいに戻りました。そうしたら、父親の虎も追ってきたわけです。そうすると、鄭思遠はその虎を自分の子分のように、まるで馬のようにコントロールできるようにになりました。道教の導師が大体医師ができるので、病気を診療しに行くときにいつも虎に乗って出かけたそうです。赤ちゃん虎が成長して、薬箱を首にぶらさげて山を降りて巡回に行くですね。もうひとつ、エピソードがあります、鄭思遠は橋のところで知り合いと会って、知り合いが非常につらい顔をしていたので、どこが悪いのかと聞いたたら、歯が痛いと答えました。当時、虎のひげが歯の治療に一番効くという話があつて、鄭思遠は自分が乗っている虎の頭を抑えてひげを一本抜いて友達に渡したという話があつたんです。これは虎退治よりは虎を使役するというか、馬として使っていたという最高の形で、虎の仙人だからこその話ですね。

虎にまつわる物語がたくさんあるが、辿ってみれば、宗教の説話の影響を受けたものが多いのです。仏典を見ますと、『菩薩投身餓虎起塔因縁経』（『大蔵経』）に次のような段落があります。

其山下有絶崖深谷。底有一虎新生七子。時天降大雪。虎母抱子已經三日不得求食。懼子凍死守餓護子。雪落不息母子飢困喪命不久。虎母既爲飢火所逼還欲噉子。時山諸仙道士。見是事已更相勸曰。誰能捨身救濟衆生。今正是時。太子聞已唱曰善哉。吾願果矣。往到崖頭下向望

視。見虎母抱子爲雪所覆生大悲心。立住山頭寂然入定。即得清淨無生法忍。觀見過去無數劫事。未來亦爾。即還白師及五百同學。吾今捨身願各隨喜。師曰。卿學道日淺知見未廣。何忽自天捨所愛身。太子答曰。吾昔有願應捨千身。前已曾捨九百九十九身。今日所捨足滿一千身。是故捨耳。願師隨喜。（中略）又發誓言。今我以血肉救彼餓虎。餘舍利骨。我父母後時必爲起塔。令一切衆生身諸病苦宿罪因緣湯藥針灸不得差者。來我塔處至心供養。隨病輕重不過百日必得除愈。若實不虛者。諸天降雨香華。諸天應聲即雨曼陀羅華。地皆震動。太子即解鹿皮之衣以纏頭目。合手投身虎前。於是虎母得食菩薩肉母子俱活。

全部漢字で本当申し訳ないのですが、インドの王子様が、一般の人たちを救うためにまず、自分を身売りしてお金を皆さんに分けました。当時は伝染病がはやっていて、その伝染病を治療するために、薬を求めにいくわけです。それで、仏様に帰依して修行しているときに一頭の母虎が七匹の赤ちゃんを産んだわけです。大雪が降っていて、餌がないので、母虎がお腹がすいて困っているという状況が山の上から見えたわけです。そうすると、その母虎が、飢えを我慢できなくて自分の赤ちゃんを食べようとしているところに、王子様が自分が虎のところに行つて虎の餌になると、言いだしました。そうすると当然、周りの人々が止めるわけ、王子様は、自分がもう前世で既に九百九十九回自分の身を捨ててしまったと、後一回で一千回になると輪廻から離脱して成就すると言います。それで、自分の、鹿の皮で出来た上着を脱いで、頭の方から被つて虎のところに行きました。母虎がこれを食べ、母子ともに生き残つたという話です。

これは仏教の考え方ですが、経世済民という儒教の考え方もありま
す。ただし、仏教は基本的によい行いをして、仏陀に自分の身を捧げて
来世で幸せになるということを最高の思想にしているのに対して、儒教
は勉強をして有能な官僚になって、よい政治を行って世の中を治めて、
一般の庶民を救うという考え方です。

さらに、「峡口道士」(『解頤録』)ですが、大体の意味を説明しますと、
昔は峡口というところに崖があつて、真ん中に川、両側に山で、非常に
狭いところに船が通るのです。そこに船が通る時に周りに虎がたくさん
出没しているから、船が通ることができないと、必ず、皆殺されてしま
うので、毎回ここに行く前に、人を出して、虎に食べてもらう。それで
残りの人は安全で通ります。では、誰が餌になるかということ、ある
日、船が通るときにこの中で一番貧乏でやせた奴が二人皆に出されてし
まいました。二人は「岸に上がってもいいのだが、一晩待ってくれ。明
日戻ってこなければ、みんな行ってください」と言いました。一人は、
探しに行ったら案の定、道教の導師が虎に化けて暴れているとわかりま
した。導師の寝ている間にベッドのところに掛けてある虎の皮を奪った
わけです。そうすると、導師が返してくれと懇願しました。その訳を聞
いてみると、自分は神様に対して裏切り行為をやってしまった罪を犯し
てしまったので、罰として虎になってしまいました。それで、自分は千
人を食べないといけないのですが、既に九百九十九人を食べてしまつた
と。あと一人食べたなら、解脱して、虎から人間に戻る。しかし、自分の
虎の皮を奪えば、自分が人間に戻れない場合は、更に別の人が悪い虎に
なつて、千人を食べることになると言いました。

これもちょうどさきほどの『菩薩投身餓虎起塔因縁経』と似た話で、

千人や九百九十九人というキーワードがあります。宋の時代になると、
道教の導師が虎に化けるだけでなく、仏教の坊さんが虎に化けるとい
話もできます。虎の恩返しという話もあります。虎がどういふふう
に恩返しするかというと、虎の喉のところに骨が一本ささつて、つかえて
いるところへ、人がその刺さっている骨を取り除いてあげると、虎が一
礼をして逃げたわけです。そうすると、それ以降、毎晩のように必ず獲
物を捕らえてきて、鹿や猪やウサギなどを置いていくのです。そうす
ると、村人がその人を捕まえて知事のところへ届けに行くんです。訳を説
明したら納得してもらつたのですが、ある日、虎が来てその人の家をめ
ちゃくちゃ壊しました。それで、その人はここに住んではいけないと虎
が教えてくれたと、悟つたのです。住まいを移したら、それ以降虎が来
なくなつたという話です。

「稽胡」(『広異記』)と「張竭忠」(『博異記』)に妖怪変化、恩返しな
どの物語がいっぱいあります。例えば、虎が難産して困っているときに、
ある女性に助けってもらつてそれ以降、餌の獣を毎日届けに行くという話
は虎の恩返しの話です。

このほか、虎に関する笑い話もあります。虎が猛獣ですから、本来恐
れられた対象なのですが、東南アジアへ行くと、虎が崇拜される対象に
なるわけですね。一方、中国では恐れられた対象ですが、茶化された対
象となる時もあります。例えば、「傳黃中」(『朝野僉載』)の話ですが、
ある人がお酒を飲んで酔っぱらつて崖の上で寝ていたところへ、虎が
やってきて、その人の周りを、匂いをかいてるとき、ヒゲがその人の
鼻にあたつてしまったため、その人が、くすぐつたくて、くしゃみをし
たのです。そうすると、虎がびっくりして崖から落ちて死んでしまいま

した。

もうひとつ「劉牧」（『独異記』）の話のように、人を助ける虎の話もあります。ある女の人は子供のときに許嫁の人がいたのですが、その後、許嫁の人が引越しをすると、消息を絶ってしまいました。その人の父親が、県の知事を退いたあと、家で晴耕雨読の生活をしているのですが、次の知事の息子に自分の娘を結婚させる約束をしてしまいました。ちょうど結婚式の日に新婦を迎えに来てきたときに、新婦が虎にさらわれてしまいました。かつて許嫁となった男の人がある日、旅をしているとき、たまたまある廟に辿り着いて、そこで小さな虎が三匹がいるのを見つけてきました。赤ちゃん虎を殺すのにしのびないということで、ほっといていたら、夜中に親虎が来て暴れたのです。親虎が廟の窓を壊して、柵の間に頭を挟まれてしまったから、殺したのです。すると外で音がしたので、その男の人が人間なのか、鬼なのかと聞いたら、かすかな声で人間ですと答えました。そうすると偶然に前に結婚を約束した娘と巡り合ったということですが、偶然ですが、虎が嫁さんを許嫁のところに戻り返したという話ですね。

以上のように、いくつかの物語を紹介しながら、中国の筆記小説に描かれた虎を取り上げて、説明しました。中国幻想ものがたりの流れは、六朝時代に大量に作られた「六朝志怪」と呼ばれる怪異短編小説群を直接の源としています。この流れは、八世紀後半の中唐以降、続々と生み出された短編小説群「唐代传奇」を受け継がれ、小説ジャンルとして飛躍的な成熟を遂げました。これを受け、宋代以降、清代に至るまで、無数の文人の手で、多種多様の物語幻想を駆使した短編小説が、創作されました。これら宋代以降に書かれた短編小説群は「筆記小説」と総称さ

れ、正統的な教養を身につけた知識人が、気晴らしのために執筆するものが一般的でした。

知識人の手になる「文言小説」の隆盛と平行して、宋代以降、民衆世界の語り物が盛んになり、やがてこれを文字化した講釈師の語り口そのまま生かした、話し言葉の「白話」が用いられました。のちに中国小説史の主流になったのは、この盛り場育ちの「白話小説」のほうでした。明代に刊行された『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』、清代中期に著された『紅樓夢』など、物語幻想を大々的に展開した長編小説も、また明末に編纂された短編小説集「三言」「二拍」などに収められた、趣向を凝らした短編小説群も、すべて白話で書かれたものです。

宋代以降の中国小説史は、六朝志怪・唐代传奇以来の文言を用いた小説と、もともと民衆世界の文体だった白話を用いた小説が、平行して書き継がれました。ただ、この二種類の小説形式のうち、文言小説のほうは、それでも優雅な知的遊戯の一種として認知されましたが、白話小説のほうは、とりわけ明代以降はすべて有名無名の知識人を作者とするにかかわらず、伝統的な文学観のもとで、あつさり「俗文学」と一括りにされ、蔑視されつづけました。

いずれにせよ、中国の筆記小説の中に虎の物語がたくさん取り上げられています。それは、やはり虎が昔の時代に数多く生息していると関係があります。

最後に、物語の魅力のひとつと触れさせていただきました、まずヒーローの存在、ヒーローの魅力が重要です。「水滸伝」はまさにヒーローの集まりで、それぞれ気質があつて、活躍するストーリーがあります。またプロットですが、英雄伝説の特徴として、王家の出身とか、生まれ

るときに異常誕生とか、例えば、山に捨てられて、もしくは船に乗って漂流したりして、さまざまな試練を乗り越えたりするのです。『水滸伝』のヒーローもまさにそういう試練を乗り越えていきます。その中で虎を退治して、各地を漂流して、流浪しているうちに不思議な兆しに示されて、大団円を迎えていきます。主人公のヒーローは単なる空想のヒーローではなく、感情の面において、読者と共鳴できるような登場人物でないといけないのです。実際の小説の場面を見ると、いろいろな立場、角度、視点から描かれています。鳥瞰の視点から、また低いローアングルから描いたり、登場人物の視点から描いているわけです。これを想像しますと、エンターテイメントというのは皆共通しているのではないかと思いました。ハリウッド映画が何故あんなに世界で受け入れられているかという点、やはりエンターテイメントの原理原則に基づいて作られているわけです。それが、私たちが知らず知らずに映画の中の人物と同一化して、ストーリーを楽しんでいるのです。但し、映像と小説がどこが違うかと言いますと、私たち小説を読むときと無いものがひとつだけあります。それが音楽なのです。人間が音楽によって映画の世界に引き込まれて、自然と現実の世界から映像の中にはいつてしまうというような役割があるのではないかと思います。

以上簡単に虎にかかわる物語をお話させていただきました。本日は御静聴どうもありがとうございました。

司会 「まだ少し時間ありますので、もしご質問等ございましたら。お手を挙げていただきますでしょうか？」

質問 「今日は南方熊楠の『十二支考』が、発端になっているのでお話

いただいたんですが、日本だと中島敦の『山月記』が有名ですが、それは、あえて今日は触れないんですか。」

講師 「一応今日は、『三月記』を持ってきましたが、現代に入ってくるのと、とりとめなくいろいろな話を展開しなければなりませんので、あえて筆記小説などの文献にとどまらせていただきました。」

会場拍手。

(らん ひろたけ・本学国際人文学部国際交流学科准教授)

